

タイトル：2020 年度教育セミナー（第 16 回）

日時：2020 年 9 月 17 日（木）～20 日（日）

オンライン開催

オスマン帝国第二次立憲政期における「トルコアラブ」帝国への視点

ーアブデュルハミト・ゼフラーヴィーとズィヤ・ギョカルプの見た「トルコアラブ」を中心

岩倉一澄(九州大学大学院人文科学府 修士課程 1 年)

九州大学では、毎年修士課程 1 年生がこのセミナーへ参加しており、私も先輩方や先生方からこのセミナーについてお話を伺っていました。そのこともあり、私も参加・発表をさせて頂くことになりました。その中で、このセミナーに参加できたことは、研究を進める上で有意義なものになりました。

有意義なものだと感じた理由はいくつかありますが、一点目は様々な分野をご専門にされている先生方のセミナーや受講生の発表を聞くことができた点です。私の所属する研究室では、主として歴史学に関連する講義・ゼミが行われているため、それ以外の分野(とりわけ現代や手法)についてのお話を聞くことで刺激を受けることができました。講義・発表の内容はもちろんですが、他分野ならではの新しい視点や、研究手法にも関連するような興味深いお話を聞くことで、自分の研究テーマや手法とも照らし合わせることもできた点が大きかったと感じています。

二点目は、研究発表をすることで、様々な価値ある視点を得ることができたということです。特に大きかったのは、様々な専門分野の方に伝わる発表を行うこと、また伝わるような史料訳を作ることがいかに難しいかということでした。今回私が行った発表の質疑応答では、史料訳に関する指摘を多く受けました。これを通して、自分の研究を伝わりやすくするような訳をすることに対する意識を改めて実感し、またこれまでの私の研究発表に対する姿勢に対して、反省すべき点が多くあると感じました。自分の研究について知っている人の多い学内の発表だけでは得られないような、研究に対する姿勢への視点を、研究発表を通して得られたことは、今後修士論文を執筆するうえでも、研究を続けていくうえでも大きかったと考えています。

三点目は、同世代の大学院生がどのような研究をしているのか、どのような視点を持っているかを知ることができたことです。普段学内で研究している限り、なかなか学外の院生がどのようなことをしているのかを知る機会はそう多くありません。しかし、発表や質問を通じて、同世代の院生が行っている研究を知ることができ、励みになりました。今年は新型コロナウイルスの影響で直接交流ができなかったことは残念ではありましたが、それでも学外の学生のお話を聞くことができたのは、モチベーションを高めるという点で大きいものでした。

総じて、セミナーでは学内での研究活動からだけでは得られない刺激や視点を、多く得ることができました。このような有意義なセミナーに参加できたことは、これからの研究活動の糧になると感じています。最後に、特に今年はオンラインという前例のない開催形式であった中で、今回のセミナーに尽力してくださった講師の先生方、スタッフの皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。